

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 49

播磨・奥村廃寺の双塔について

寺岡 洋



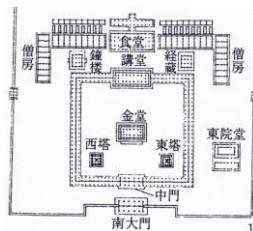
はじめに

〔たつの市2007〕より

奥村廃寺については、今までに2回、『むくげ通信』で紹介している。美作道と関連して、「揖保郡・讚容郡の古代寺院—美作道の古代寺院」(255号 2012.11)、軒丸瓦と関連して「播磨の新羅系及び傍流の軒丸瓦」(267号 2014.11)で取り上げた。軒丸瓦に関しては、『東アジア瓦研究』第4号に書き直した〔寺岡2015〕。

奥村廃寺は、播磨国最大の郡である揖保郡(18里)に建立され、美作道を介して美作・出雲・伯耆・因幡の古代寺院と密接なつながりが想定される核心的な寺院である。周辺地域での多くの渡来系氏族の居住、特異な意匠をもつ軒瓦の採用などから、渡来系氏族が建立を主導した寺院と考えられている。

奥村廃寺でまず目につくのは上図の推定復原図のように金堂の左右に塔が配される特異な伽藍配置である。播磨の加古川流域は薬師寺式双塔伽藍(右図)が河内と並んで集中する地域であるが、揖保川流域に建立された奥村廃寺は双塔の建つ位置がまったく異なる。今回は奥村廃寺の双塔伽藍を取り上げたい。加古川流域の双塔伽藍については、「播磨の双塔伽藍からみる“知識”的ネットワーク」(243号 2010.11)で紹介している。



奥村廃寺の立地

西に揖保川の本流、東に揖保川水系・林田川が南流する。東と南は水田が広がり、正方位の条里地割が広い範囲で残る。

愛宕山(167.8m)南麓に立地し、南辺を県道724号線(姫路新宮線)が東西に走る。所在地は、たつの市神岡町奥村・北横内。県道沿いには店舗が増えている。

姫路駅から分岐する姫新線・東脇崎(はしさき)駅から東へ約1km。調査地は更地で残されている。裏山のタンクが目印で、県道から遺跡の小さな看板が見える。

『播磨国風土記』の揖保郡(いひほのこほり)上岡里(かみおかのさと)に比定され、林田里から分かれと記される。

大和での三角関係?の仲裁に出かける出雲国の阿菩大

神(あほのおおかみ)が居たとあり、神話時代から山陰地域との交通路(古美作道?)が存在していたことが窺える。

周辺の遺跡—美作道・山陽道・寺院

廃寺北西山麓の大住寺古墳群は59基からなる群集墳で、本来の数はさらに多かったと推測されている〔岸本2013〕。北東には奈良時代の建物群が調査されているが、詳細不明〔播磨考古学研究会2005〕。南面には古代山陽道から分岐した美作道が東西に通過する。

美作道を西に進み揖保川を渡れば越部(こしへ)廃寺(越部里)と越部駅家(うまや)が立地した。駅家址は脇崎天満遺跡(たつの市新宮町)が有力比定地である。

真南に約3km下がれば、林田川東岸に中井廃寺(少宅里)が位置する。中井廃寺の南面を古代山陽道が東西に通過し、さらに東へ3kmばかり行けば、邑智(おほち)駅家と西脇廃寺(揖保郡邑智里)が位置する。

山陽道を西へ揖保川を渡れば、山陽道沿いに寺院が毎に建立されている。小神(おがみ)廃寺(揖保里)・中垣内(なかがいち)廃寺(出水里)・小犬丸中谷廃寺(桑原里)など。そして日本で初めて駅家址があることが確定した布勢(ふせ)駅家(桑原里)が位置する。

奥村廃寺の調査

廃寺址と周辺の調査報告書が3冊刊行されている。中心部分の調査は概要報告だが、出土した瓦については今里氏による詳細な報告がある〔龍野市1997〕。



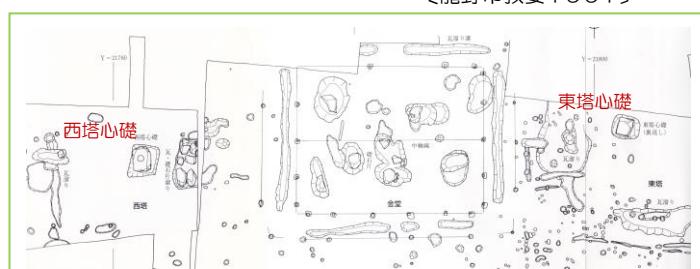
寺域の東南部の一画が道路工事により調査され、幢竿(どうかん 旗竿)支柱跡や掘立柱建物跡が確認されている〔龍野市2002、兵庫県2009〕。

推定寺域 南限と東限を画す溝から、約150m四方と推定されており、美作道に南面したようである。美作道付近には幢竿支柱が立てられ、莊嚴されている。

図で見るよう、伽藍は推定寺域の北側に偏しており、南面は広い空間である。現在の県道は寺域の中央を東西に横切る格好になる。幢竿支柱跡は交差点のすこし西南あたりになる。時代の異なる遺構が確認されている。

伽藍配置—金堂両脇に2基の塔—

〔龍野市教委1997〕



金堂の左右（東西）に塔、金堂の背後に講堂が配される双塔伽藍である。

金 堂 右図（東から）

「溝に囲まれて、東西17m、南北14mの内部に金堂建物」が推定されている。溝には瓦が大量に入っていた。「溝の内側には角柱



穴が並び、さらに内側には礎石片が埋め込まれた土坑が散在」していた。「基壇や階段などは削平のため不明なうえ、掘り込み地業（地盤の強化跡）もみられない」。「溝の開削時期は建物廃絶後と思われる」。

東 塔 「金堂の中心から約20m東の位置にある心礎と、その周囲に存在する瓦溜めから想定」されている。心礎は大きく動いていないと推定され、「掘り込み地業や基壇の痕跡は一切観察できず、規模は不明」。

西 塔 「金堂の中心から約21m西の位置にある心礎と、その周囲に存在する瓦溜めや礎石破片から想定」されている。「掘り込み地業や基壇の痕跡は一切観察できず、やはり規模は不明」。農業用倉庫建設に伴う調査。

東西両塔の「基壇規模は36~38尺と推定」され、金堂の中心軸からほぼ東西一直線に並ぶ。両塔の心礎間の距離は約40m。東西両塔跡からは見つかった塔心礎は龍野歴史文化資料館に移されている。

講 堂 「金堂の背後の山麓に一段高くなった平坦面があり、荒神社参道がある。むしろこの高さが本来の地形をとどめるものと思われる」。「3個の礎石を確認し、そのうち北側の2個は円柱座造出（つくりだし）を上面にしており、現位置と想定できる」。講堂の礎石と推定。

僧 坊？ 西塔の西に掘立柱建物跡（南北桁行6間×東西梁行3間）が確認され、僧坊かと推定されている。

瓦積基壇か 金堂・塔の基壇は削平され基壇の化粧は不明であったが、宮本長二郎氏は瓦の出土状況などから、塔は瓦積基壇と推定され、金堂もやはり瓦積基壇であったものが木製基壇に改修されたとされる〔宮本1997〕。瓦積基壇は渡来系寺院の指標のひとつ。

列島で展開した特異な双塔伽藍（新治廃寺式）

奥村廃寺でまず目を引くのは、金堂左右に塔を配する特異な双塔伽藍である。金堂の南側には広い空間があり、この配置にこだわったとしか考えられない。

日本列島では塔を2基もつ双塔伽藍そのものが少なく（30余例）、さらに金堂の両脇に塔が建つ例は極めて稀な例になる。現在、列島内では、**新治（にいはり）廃寺（常陸）・三ツ塚廃寺（丹波）・来美（くるみ）廃寺（出雲）**で類例が確認されるのみ。古代朝鮮ではこの様式の双塔伽藍は現在まで調査されておらず、存在しない可能性が高い。中国は詳細不明。

播磨の加古川流域でみられる双塔伽藍（繁昌（はんじょう）

う）廃寺・広渡（こうど）廃寺・新部大寺（しんべおおでら）廃寺・野条廃寺（のじょう））は、南面に双塔を配するいわゆる「薬師寺式双塔伽藍」であり、正統派？である。

金堂の両脇に塔を配する双塔伽藍は類例が少ないせいいか一般的な呼称が定着していないようである。最初に遺構が確認された新治廃寺にちなみ、以下、「新治廃寺式」を使う。新治廃寺を調査された高井悌三郎氏は、三ツ塚廃寺や繁昌廃寺（賀毛郡／加西市）の調査もされており、双塔伽藍との縁が深い。

新治廃寺（国史跡 茨城県筑西市）

新治廃寺は遠く、播磨との関係は考えにくいので、今回は棚に上げ、三ツ塚廃寺と来美廃寺の双塔をみてみる。ただ、溝口廃寺（神前郡／姫路市）と下野薬師寺（栃木県下野市）のように、750kmも離れて軒丸瓦が同範（同じ木型を使用）というような稀有な例もあるが。

溝口廃寺は推定双塔伽藍、下野薬師寺は新羅様式の一塔三金堂（塔の東・西・北に金堂を配置）と、どちらも伽藍配置は例が少ないので共通している。



*三ツ塚廃寺史跡公園

三ツ塚廃寺の双塔 一 法起寺式から新治廃寺式へ

三ツ塚廃寺は兵庫県丹波市（旧丹波国氷上郡）市島町に所在し、史跡公園（国史跡）として整備されている。JR福知山線・市島駅から東へおよそ1km強。

廃寺周辺には奈良時代の建物跡が多く点在し、あるいは氷上郡家（ひかみぐうけ）と関連するかとも推測されている。双塔基壇は瓦積基壇で復原されている。

三ツ塚廃寺の双塔伽藍について、上原真人氏の所説をみてみる〔上原2006〕。

「丹波三ツ塚廃寺は、当初、東塔が金堂とともに造営され、後に西塔が加わったと考えられる」。

*西に金堂、東に塔が並ぶ伽藍配置は「法起寺（ほっきじ）式」（右図）と呼称され、列島で最も多い伽藍配置。金堂と塔の位置を入れ替えれば「法隆寺式」になる。



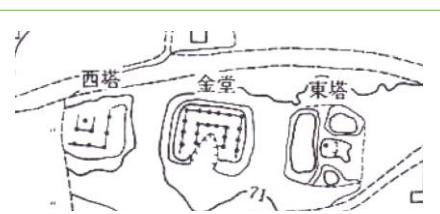
「三ツ塚廃寺の創建年代は、…本薬師寺創建よりもさかのぼると推定できる。…この時点（創建時）で列島には双塔伽藍の情報は入っていなかった」。

*本薬師寺は、680年に発願され（天武紀九年条）、688年までに、少なくとも金堂が完成していた（持統紀二年条）。日本列島での双塔伽藍は本薬師寺造営を嚆矢とするのが一般であるが、河内の双塔伽藍は本薬師寺に先行する可能性がある〔安村2007他〕。

さらに、本薬師寺の西塔の完成は奈良時代まで下るという有力な指摘がある〔花谷2003〕。

三ツ塚廃寺の造営者は、双塔伽藍にこだわりがあったのか、「金堂前庭の東西に塔を配するという原則を、金堂の東西に塔を配するというプランに置換して、双塔伽藍を実現したもの」と指摘される。

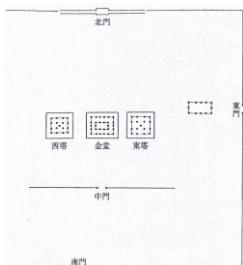
単塔の「法起寺式」で建立された三ツ塚廃寺を双塔に模様替えする際



に、金堂の西に西塔を作ったのが三ツ塚廃寺の双塔伽藍であるとされる。後代に西塔を建てたものであり、創建時には双塔は計画されていなかった、ということになる。

三ツ塚廃寺の東西両塔心礎の距離は32.6mと狭く、法起寺式ではかなり窮屈であったであろう。

奥村廃寺の東西両塔の建立年代はどうであったか気になるところだが、塔基壇は削平されており、検証はむつかしいようだ。



来美廃寺（山代郷北新造院 国史跡）

『播磨国風土記』を読むと出雲との交流を窺える。峰相山（みねあいさん）古窯跡群（姫路市）で焼かれた蓮華文帶鷦鷯尾（しひ）

や、奥村廃寺オリジナルの珠文帯軒丸瓦が日本海地域でみられるなど、モノでも交流は裏付けられており、少し丁寧に出雲の新治廃寺式双塔伽藍である来美廃寺（山代郷北新造院）を見てみる。



*ハ雲立つ風土記の丘周辺

来美廃寺の所在地・「新造院」について

来美廃寺はJR松江駅の東南3km強、松江市矢田町に所在し、史跡公園に整備されている。周辺一帯は、「島根県立ハ雲立つ風土記の丘」に指定され、国史跡の出雲国府跡・出雲国分寺跡・山代郷正倉跡、後期古墳では山代二子塚・山代方墳などの著名な遺跡が点在する。資料館も2ヶ所あり、自転車の散歩に好適。

来美廃寺が「山代郷北新造院」と呼ばれるのは、天平五年（733）に編纂された『出雲國風土記』の記載による。風土記には郡毎に寺院・新造院（しんそうのいん）が列記され、意宇（おう）郡には、「教昊寺（きょうこうじ）」と、新造院3ヶ所存在した。所在地、嚴堂（ごんどう）・塔などの建物、僧の有無、建立した人物など、奈良時代中期の状況が記録され、極めて貴重な文献。新造院が寺であるのは確かだが、なぜ、寺名がないのか見解が分かれれる。

「新造院一所 山代郷の中に在り 郡家の西北四里二百步 嚴堂を建立（た）つ 僧無し 日置君目烈が造る」

意宇郡（おうのこほり）山代郷には二所の新造院があり、意宇郡家からの方角と距離（西北四里二百步）により、来美廃寺を「北新造院」に、四王寺（しわい）址（松江市山代町）を「南新造院」に比定している。



立地・周辺遺跡 山代郷北新造院跡調査区域配置図 ↑

標高約40m、丘陵南向き斜面を削り、谷側には盛土して上下二段の平坦面を造成している。この場所にこだわりがあったのであろうか。下段は大部分削平されており、推定講堂（第4基壇）の一部のみ確認された。

南に茶臼山（171m 風土記の神名樋山）があって展望のよくない狭い谷を選地しており、古代寺院の立地場所としては一般的でない。一方、四王寺址（山代郷南新造院）は神名樋山（かんなびやま）の南山裾に立地しており、出雲国府や意宇郡家が望めたであろう（左図）。

僧寺と尼寺 一つの郷（さと）に寺が2ヶ所も造られているのは、あるいは、僧寺と尼寺のような関係であったのであろうか。南新造院には僧が一人いたとあるので、北新造院は尼寺？ 百濟では僧寺と尼寺は鐘の音の聞こえる距離に造られたそうで、鐘声は届いただろうか？

大原郡斐伊郷（ひのさと）にも二所の新造院があり、一所は僧5人、一所は尼二人とあるので、ほぼ確実に僧寺と尼寺である。大原郡は意宇郡の西隣。

尼寺を建立した斐伊郷人・樋伊支知麻呂（ひのきちのまろ）は、地名の樋伊（ひ）と族名の「支知（きち 吉）」からなる複姓であり、渡来系の吉氏の同族ではないかと考えられる。吉氏の祖は蟾津江（ソムジンガン）流域の己汶（こもん）の人。蛇足だが、里が郷に変わった年次については、『出雲國風土記』に記事があり、靈亀元年（715）である。

伽藍配置の変遷

上段平坦面には東西に3ヶ所の基壇があり、西から第1・2・3基壇と呼ばれる。中央が金堂、金堂の左右に塔を配する新治廃寺式の双塔伽藍。金堂は瓦積基壇。



*推定復原図

「最も早く造られたのが金堂で、その時期は7世紀後半から8世紀初頭であろう。しかし、金堂建立時点では他の堂塔を計画していなかった可能性がある」。

金堂に次いで、第3基壇に東塔、第4基壇に推定講堂、「最後に建設されたと考えられるのが第1基壇の西塔（？）で、8世紀後半から9世紀初頭頃であろう」と伽藍の建立について推測されている〔島根県2007〕。

双塔に関しては、東塔跡では石製相輪（そうりん）の破片、風鐸（ふうたく）などが出土し塔であるのは確実であるが、西塔は推定になる。下段には東面する講堂が想定され、伽藍配置は来美廃寺以外に例がない。金堂跡から須弥壇（しゅみだん）の遺構が確認されたのが特筆される。

双塔伽藍として完成するのにおよそ100年もの年月を要しており、やはり、「金堂建立時点では他の堂塔を計画していなかった可能性がある」と考えざるを得ないようである。来美廃寺の新治廃寺式の伽藍配置については、「地形的制約による」ものとされる。

「酒長兄」→



造寺の知識集団と伽藍の整備

「創建当初に計画されていなかった堂塔を建設する理由は想像の域を出ないが、建物ごとに寄進者が異なる可能性や、時間の経過と共に北新造院そのものの性格や四天王信仰との関り、造塔意識の変化などが考えられる」とある。

文字瓦 文字瓦が出土しており、「寄進者」の一端が判明する〔柳浦2003〕。

「弟世方女 良」 金堂周辺で出土

*鷂尾の鰐部 寄進者は女性?

「善（善?）病仕奉口」 *願文?

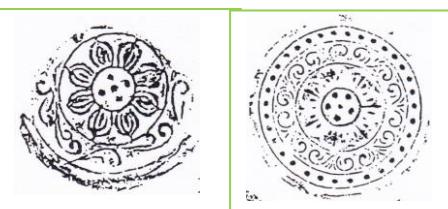
「酒長兄」 軒丸瓦V類の丸瓦部背部

*人名 瓦の寄進者であろう

鷂尾は金堂の大棟に使われるものであり、そこに寄進された鷂尾が使われたのであれば、金堂も「知識」により建立された可能性がある。西塔が建立される頃には、「知識の寺」になっていたのでは?

新羅系文様

「酒長兄」が
ヘラ描きされた
「軒丸瓦V類」
は、西塔（第1



基壇）で使われたようだ。 来美廃寺 出雲国分寺

この「単弁八葉蓮華文軒丸瓦」は、花弁の形状と外区の唐草文が特徴で、新羅系文様になる。

亀田修一氏「2006」によれば、「系譜については、出雲国分寺跡例と同じく、外区に唐草文をめぐらす軒丸瓦は基本的に日本の瓦ではなく、統一新羅様式の瓦に多く見られる特徴である」と指摘されている。

また、「内区の蓮華文は蓮弁が線で紡錘形に表現される特徴をもつ」。このような蓮華文は新羅でも日本でもあまり見られず、高句麗との関連を推測されている。

つまり、新羅・高句麗系譜の意匠を新たに出雲で創案し、来美廃寺や出雲国分寺で使ったのである。新羅や高句麗の瓦についての情報をもっていた集団の存在が推測できる。同文（同じ文様）のものが四王寺址、天寺平（て

んじびら）廃寺（出雲市）から、唐草文の反転方向が異なるものが長門深川廃寺（長門市）で出土しており、日本海沿いにネットワークが広がっていたようである。

『出雲国風土記』には、「(北)新造院」を造ったのは日置君（へきのきみ・ひおきのきみ）目烈（まれ）と記されているが、彼は金堂建立を主導した人物であり、日置君以外にも多くの集団や個人が造寺に関わっていたのであろう。

伯耆・因幡の複数の塔を持つ寺院

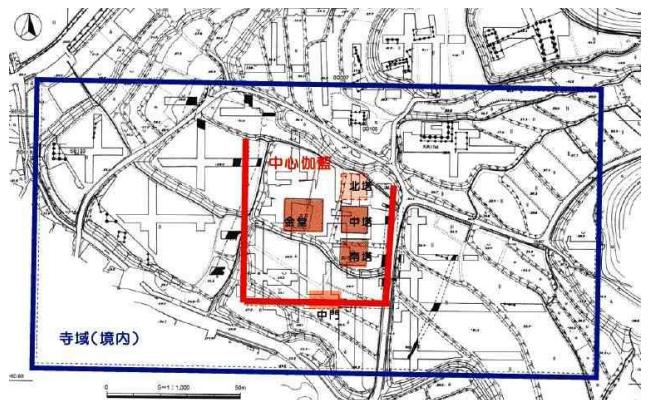
日本海沿いの伯耆と因幡には類例のない双塔寺院が存在しており、紹介する。塔に対する考え方が地域により、造寺集団により異なったのであろう。

上淀（かみよど）廃寺（国史跡 米子市淀江町）

法隆寺金堂壁画と並ぶ日本最古級の壁画や彩色された塑像片が多数出土し、古代寺院金堂内の華麗な実態の一端が明らかになった。史跡公園に整備されており、資料館も完備。周辺に向山古墳群（史跡）などが点在する。

金堂の東に三塔（北・中・南）が南北一線に並び、一金堂三塔という日本唯一の伽藍配置である。

北塔は心礎のみ確認されており、実際に塔は建立されなかった。それでも東に双塔が南北に並び建つ列島唯一の例になる。金堂、中・南塔は瓦積基壇。



上淀廃寺 寺域・伽藍配置図

「三塔南北配置のなぞ」

毎日新聞（1996.3.1）に掲載された森郁夫氏の見解を紹介する。「仏典には南方の世界に文殊菩薩、北方の世界には普賢菩薩が住むと説かれている。……文殊菩薩と普賢菩薩が釈迦如来の脇侍であることからすれば、上淀廃寺の三塔は釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩のいわゆる釈迦三尊をまつるように計画されたものと考えられる」。塔は「佛」を象徴するとされる。

軒丸瓦 一上淀廃寺式軒丸瓦

創建当初の軒丸瓦は「上淀廃寺式軒丸瓦」と呼称される単弁十二弁蓮華文軒丸瓦（右図）で、1930年代には「他に類例なき奇異なる意匠」と評価されたそう



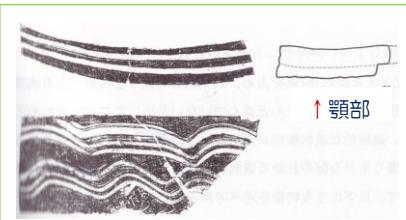
である。因幡・伯耆・出雲・隱岐の山陰4ヶ国の8寺院・遺跡から出土しており、日本海沿岸ネットワークの中心的な寺院であったようだ。

文様は新羅系ともいわれるがどうだろう。出雲では、意宇郡の**教昊寺**（安来市）で出土している。

顎部施文軒平瓦→

軒平瓦の顎部に文様を施文する例は全国で78遺跡だそうだが〔亀田1995〕、陸奥・山背・播磨・吉備に遍在する。播磨での出土例が13例と最も多く、**吸谷**（すいだに）**廃寺**例と近似すると指摘されている。

吸谷廃寺（賀毛郡）については、「顎面には回転プレスによる細かい櫛目波状文がつく」〔井内1990〕と指摘される。出雲では**教昊寺**と**来美廃寺**で出土している。



栄本（とちもと）廃寺

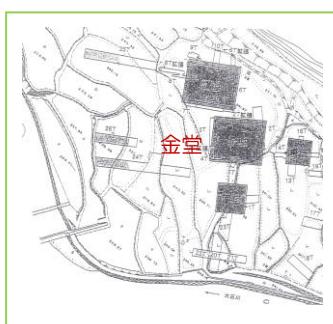
（国史跡 鳥取市国府町）

金堂の南面と東面に塔を配した異例の双塔伽藍。

築造時期については、「出土遺物等から南塔の創建時期は8世紀前半頃、講堂は8世紀中頃と推定される」。

「金堂は時期を特定する資料に乏しいが、7世紀末頃の須恵器片が出土していることから、その時期に遡る可能性がある」〔鳥取県2003〕とされる。

東塔について年代は不明のようだが、常識的には金堂に続いて建立されるから、さほど時期を置かずに伽藍が揃ったようだ。ちなみに、瓦は出土していない。山間部で雪が多いからであろうか。



古代山陰道と古代寺院の立地

古代山陰道は、但馬国境（蒲生峠）から因幡国府へのルートに2説あり、山間部ルート（県道31号 鳥取国府岩美線）を選べば、



栄本廃寺の側を通過する。海周りルート（国道9号線）を選べば**岩井廃寺**（鳥取県岩美町）が立地する。

県道31号線は、近世に「法美（ほうみ）往来」と呼ばれた街道と重なるが、かなりの山間部を通過し、**栄本廃寺**は山岳寺院という趣もある。近辺の銀山地区は名前の通り、銀を産出しており、古代まで遡るのかも知れない。

賞田（しょうだ）廃寺（国史跡 岡山市）

今回、まず新治廃寺式の双塔伽藍を紹介し、次いで、上淀廃寺、栄本廃寺を取り上げた。残る西日本（摂津以西）の双塔伽藍は、播磨を除けば、備前・賞田廃寺と豊前・弥勒寺のみであり、この際、紹介する。双塔伽藍は

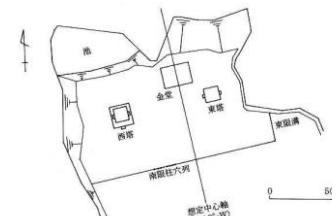
四国には存在せず、九州に1ヶ寺と極めて少ない。

賞田廃寺は下図で見る西塔が離れて建てられており、シンメトリーをなさない〔岡山市2005〕。もう少し東に寄せれば「薬師寺式」になるのだが。

賞田廃寺は飛鳥時代に

「小堂」が作られたと推定され、白鳳期に「金堂」が建築される。この時期には金堂以外の建物は検出されていない。

奈良時代に入るとまず東塔、次いで西塔の両塔が建築される。講堂は不明。小堂→金堂→東塔→西塔の順に、数十年要している。



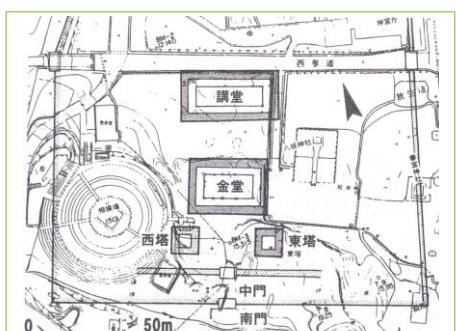
伽藍配置について報告書では、「金堂と東塔の配置は大官大寺の伽藍配置に通じる。……金堂の前に空間地を確保している。……西塔はこの空間地を確保するために西寄りに建築されたと考えられる」とある。大官大寺は東大寺ができるまで、国家仏教の拠点寺院だった。

いずれにしろ、塔を建てることに意義があり、塔の建つ位置は二義的であったようだ。

弥勒寺跡

（大分県宇佐市）

弥勒寺は宇佐神宮（八幡宮）の神宮寺で、明治初年の廢仏毀釈により廃寺とな



なった。いわゆる薬師寺式の双塔伽藍である（上図）。

天平九年（737）、「弥陀之禪院」が現在地に移され神宮寺になったと伝わる。『續日本紀』天平13年（741）条には、前年に起こった「藤原広嗣（ひろつぐ）の乱」平定の功として、八幡神に様々なものが施入されているが、そのひとつに「三重塔一区」がある。

「三重塔一区」が双塔なのか、単塔なのか詳細不明だが、本来ならば釈迦の舍利を納める塔を八幡神・神祇への返礼に建てた例になる。薬師寺式にこだわったのであろうか、南は山であり、立地がよくな。

立地といえば、**當麻寺**（奈良県葛城市）も南面する双塔伽藍だが、南は低いが山で、立地が似ている。山の中腹にかなり離れて（心礎の距離 約115m）双塔が建つ。

當麻寺の双塔伽藍も塔が2基あることに意味があるという趣である。東塔は奈良時代末、西塔は平安時代初に建てられており、建立時期がかなり下っている。

奥村廃寺双塔と古法華（ふるぼっけ）山石仏の双塔

双塔に関しては多くの所説があり、上原真人氏の論文によれば〔上原2006〕、

「一伽藍に塔を二つ（あるいはそれ以上）造営する意義は、必ずしも明確でない」、「日本の双塔伽藍には……」

特定の経典・教説をその背景として想定しにくい。むしろ、古代寺院のモニュメンタルな性格を斟酌すると、両側にそびえ建つ塔の視覚的効果、寺院莊嚴装置としての塔という先駆が指摘する側面は無視しがたい」。

塔は単塔であれ、双塔はなおさらのこと古代寺院の華であったのである。奥村廃寺の双塔について、古代播磨地域の初期仏教の状況をみながら考えてみたい。

高句麗僧・惠便（えべん）一播磨の初期仏教

今回みてきたように、奥村廃寺と距離的に比較的近い三ツ塚廢寺・来美廢寺の双塔伽藍の完成は奈良時代以降になる。奥村廃寺双塔の完成時期は明確でないが、この三ツ塚廢寺・来美廢寺の建築プランを参考にしたのではなく、独自の情報を持っていた可能性が考えられる。そのような社会的・歴史的条件はあっただろうか。

播磨の初期仏教を窺える資料がある。『日本書紀』敏達天皇13年（584）条に、大臣（おおおみ）蘇我馬子が鞍部村主（くらつくりのすぐり）司馬達等（しめだちと）・池辺直水田（いけべのあたひひた）に命じ、諸国に修行者を求めさせている。二人は渡来人で、共に仏教に縁の深い人物である。

「是（ここ）に、唯（ただ）播磨国にして、僧還俗（ほうしかえり）の者を得。名は高麗（こま）の惠便といふ。

大臣、乃ち（すなわち）以て師（のりのし）にす」

惠便是司馬達等の娘と、あと二人の娘を出家させる。日本で最初の僧は尼僧である。時代は、飛鳥寺がまだ建立されていない頃、播磨には仏教に親しい人物がいた。

『元興寺伽藍縁起并（ならびに）流記資材帳』（天平19年〔747〕成立）にもほぼ同じ内容が記されるが、登場人物が二人になる。「針闇國に脱衣の高麗の老比丘、名は惠便と老比丘尼、名は法明」。尼僧になった三人の娘は法明に就いて仏法を学んでいたとある。仏像をまつった「草堂」のような簡素な施設があったのである。

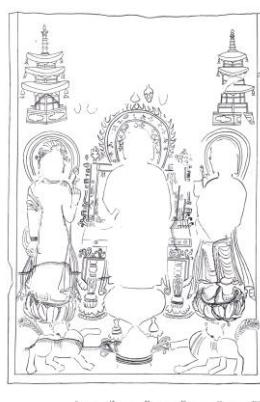
6世紀後半の播磨では、高句麗から渡來した脱衣の僧尼を受け入れていたのである。『播磨國風土記』には、渡來系の人物や集団が多く登場しており、はやく仏教が受け入れられていたことが推測できる。

案部村主司馬達止（鞍部村主司馬達等）は、繼体16年（522）に渡來し、「草堂を結び、帰依礼拝」したと『扶桑略記』（平安時代編纂）に記される。この記事は、欽明朝の『仏教公伝』（538年～552年）以前の崇仏記事としてよく知られる。播磨に来たときはかなりご高齢だったことになるが、娘が若く（11歳か17歳）、孫娘？

古法華（ふるほっけ）山石仏

（重要文化財）

古法華山石仏が広く知られるようになったのは1955年からの甲陽史学会の調査による。所在地は加古川の支流・下里川と市川に挟まれた山間部になる（加西市西長町）。周辺は長石（おさいし）の石切り場



が散在する。北条鉄道・播磨下里駅の西、約2km。

南3kmには国宝の五重塔をもつ法華山一乘寺（加西市坂本町）が立地し、7～8世紀にさかのぼる金銅仏6軀が存在し、3軀は重文に指定されている。三尊像（重要美術品）も出土したと伝わる。園田香融氏は一乘寺の故地が古法華山とされる〔園田1974〕。

石仏祠堂の西方500米ばかりの山中で、古瓦の散布地が報告されている。「笠松山の麓、その尾がゆるく傾斜して溪流にのぞむ平滑の地であり、……」とある。

繁昌天神森石仏や、「既多寺（きたでら・けたでら）知識経（播磨国賀茂郡既多寺大智度論（だいちどろん）奥書）」の存在など、賀毛郡は仏教が広く浸透している。古市晃氏は、「高麗惠便の居地として賀茂郡を想定することは、かならずしも無稽とはいえない」とされる〔古市2012〕。

三尊像の双塔

長石（凝灰岩）の板石（102枚×72枚）に「厚肉彫の諸像をきざみいだす。……諸像も多く剥落する」。

「両脇侍の頭上には三重の層塔がきざまれている。多少の破損はあるが、これだけはよく残ってその全容をしめすのである」。「むかって右の塔は高28枚、……左の塔は高さ28.5枚」。「……こうして両塔は左右対称しながらも、やや趣をこなす」。

三尊像をいれた石造厨子は、屋蓋（屋根）だけが一部破損しながらも残っていた。復原想定図 →

三尊あるいは独尊の左右に塔婆形をあらわすものは、印度みられ、中国では雲岡石窟などで類例がある。新羅では紋様塔に見られる。

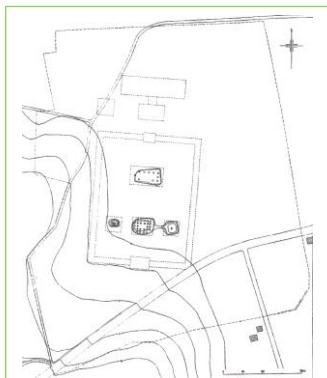


奥村廃寺の双塔

印度→中国→新羅・播磨

奥村廃寺を建立した渡来系知識集団には、古法華山石仏を祀った加古川・市川流域の知識集団とネットワークをもつものがあり、相互交流の中で中国・朝鮮の三尊像石仏の情報を入手した *印度の銅板三尊像の双塔のではないか。東アジアに広がる仏教圏の東端で、三尊像の本尊を金堂に、左右の脇侍を双塔に置き換え、寺を建てたのが奥村廃寺の双塔、と憶測している。

新治廢寺伽藍配置〔奈文研古代寺院遺跡データベース〕による



一乘寺金銅仏（重文）

「確実な出所は明らかでない」

「一乘寺の金銅仏のなかに、朝鮮の三国時代の特色を思わせるものがあるのは重要な点である」

- 聖観音菩薩立像 2軀 本尊と前立像

「ともに面相や両手の表現に素朴さをみせる異色の作品である」

- 聖観音菩薩立像 1軀

「頭部に比して体躯が矮小であるため、のんびりとした子供のような愛らしさがあり、その点は他の如来形にも通じるものがある。しかもこのような特色は、どちらかといえば朝鮮の三国時代の仏像によくみかけることに注目する必要があるだろう」

古法華山石仏

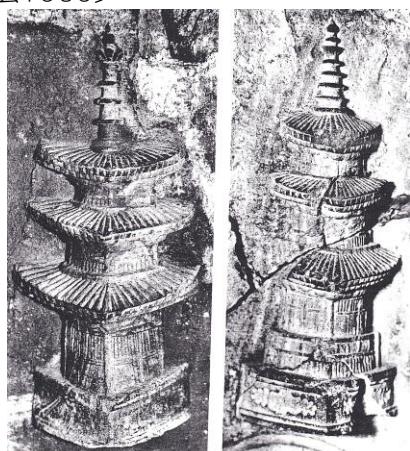
「初唐様式の影響を受けた作品であることを示している」、「この石仏が当地方で彫られ、その時代は白鳳時代にさかのぼるとも推定されるのである」

毛利 久：仏教美術の発達 p726～



↑ 古法華山石仏を納める祠堂は矢印の上

〔甲陽史学会1959〕



塔婆形

古法華山石仏（双塔）の系譜

■印度 → 中国 → 新羅・播磨

■雲岡石窟〔甲陽史学会1959〕



■新羅 塔像文博〔慶州博2000〕



■引用・参考文献

■奥村廃寺

龍野市教育委員会 1997

『奥村廃寺—調査の概要と出土瓦の研究—』

第1章 岸本道昭「奥村廃寺の調査」

第2章 宮本長二郎「金堂と塔の復原」

第3章 今里幾次「龍野市奥村廃寺の古瓦」

龍野市教育委員会 2002『奥村廃寺Ⅱ—市道沢田1号線建設に伴う寺域南東部の調査報告書—』

たつの市立埋蔵文化財センター 2007 特別展図録

『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鷲尾』

兵庫県教育委員会 2009『たつの市 奥村廃寺跡

一姫路新宮線緊急地方道路整備事業』

播磨考古学研究集会 2002

『資料集 古代寺院からみた播磨』実行委員会

播磨考古学研究集会 2003

『記録集 古代寺院からみた播磨』実行委員会

播磨考古学研究集会 2005

『資料集 古代集落からみた播磨』実行委員会

■三ツ塚廃寺

兵庫県 1992『兵庫県史』考古史料編

旧丹波三ツ塚遺跡発掘調査団 2006

『三ツ塚廃寺史跡指定30周年 記念講演会の記録

—故高井悌三郎先生を偲んで—』

■来美廃寺・上淀廃寺・栢本廃寺・賞田廃寺・弥勒寺

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002『来美廃寺』

島根県教育庁文化財課 2007『山代郷北新造院跡』

島根県立八雲立つ風土記の丘 2010 図録

『出雲国分寺と山陰道の国々』

淀江町教育文化事業団 1995『上淀廃寺』

鳥取県立博物館 2003『栢本廃寺』

『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』

賞田廃寺発掘調査団 1971『賞田廃寺発掘調査報告』

岡山市教育委員会 2005『史跡賞田廃寺跡』

苅田町教育委員会 2010『律令時代と豊前国』

■古法華山石仏

甲陽史学会1959『播磨古法華山石仏と繁昌天神森石仏』

*古法華山石仏の図版・写真はすべてこの報告書による

兵庫県 1974『兵庫県史』第一巻

・毛利 久：仏教美術の発達 p726～

・園田香融：法華山一乗寺と法道仙人 p936

国立慶州博物館 2000『新羅瓦博』

加西市 2008『加西市史』第一巻 本編

考古・古代・中世

・中村孝之：仏教の受容と古代の播磨 p199～

大手前大学史学研究所 2012 *市民公開シンポジウム

『法道仙人伝承と古代・中世の播磨』

・古市 晃：仏教伝来と播磨—高麗惠便をめぐって—

* * *

今里幾次 1995「龍野市奥村廃寺出土瓦は語る」

『播磨古瓦の研究』真陽社

亀田修一 1995「額面施文軒平瓦に関する覚書」

『近藤義郎古稀記念考古文集』

亀田修一 2006「山陰の朝鮮系瓦—出雲・石見地域を中心
に—」『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館

井内功・井内 潔 1990『東播磨古代瓦聚成』
井内古文化研究室

森 郁夫 「三塔南北配置のなぞ」毎日新聞1996.3.1

勝部 昭 2002『出雲國風土記と古代遺跡』山川出版社

柳浦俊一 2003「島根県松江市来美廃寺」
『考古学ジャーナル』508

花谷 浩 2003「薬師寺」『奈良の寺』岩波新書

「本薬師寺の西塔跡から平城薬師寺の創建瓦が大量に
出土し、西塔は本薬師寺が完成した698年に建って
いたのか、もっと後の平城薬師寺建立の718年（養
老2年）以降なのか疑問が生じました」、「平城薬師寺
も実は（大官大寺）と同じように東塔だけを先行して
建て、その後で西塔を建てる計画だった、ということ
ではないでしょうか」

上原真人 2006「双塔伽藍の系譜」『三ツ塚廃寺史跡指定
30周年 記念講演会の記録』

上原真人 2006「平城京・平安京時代の文化 文化的
伝播と変容—双塔伽藍の伝来と展開」

『列島の古代史8 古代史の流れ』岩波書店

安村俊史 2007「六寺は誰が建てたのか」

『河内六寺の輝き』柏原市立歴史資料館

岸本道昭 2013「7世紀の地域社会と領域支配 播磨國
揖保郡の古墳と寺院、郡里の成立」

『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集

寺岡 洋 2015「播磨の新羅系及び傍流の軒丸瓦」

『東アジア瓦研究』第4号 東アジア瓦研究会
* * *

『むくげ通信』 関連号数／発行年

243 2010.1.1 播磨の双塔伽藍からみる「知識」の
ネットワーク

*繁昌廃寺・広渡廃寺・新部大寺廃寺・野条廃寺?

249 2011.1.1 『出雲國風土記』の寺院を訪ねて(続)
*来美廃寺・四王寺跡・出雲国分寺・教昊寺

253 2012.0.7 伯耆・因幡の古代寺院 *栢本廃寺

255 2012.2.11 揖保郡・讚岐郡の古代寺院
—美作道の古代寺院—

267 2014.1.1 播磨の新羅系及び傍流の軒丸瓦